

## 〔研究ノート〕

## 素晴らしき新世界の遊撃

：『政治評論』とユダヤ人問題、2007-2013年

宮 崎 悠

## はじめに

ポーランドの首都において最も知られた街路は、新世界通り Nowy Świat であろう。1870年代、まだ学生であったイグナツィ・ヤン・パデレフスキ (Ignacy Jan Paderewski, 1860-1941) が演奏に通った老舗カフェ・ブリクレを横目に、ワルシャワ大学のある方向へのぼっていくと、シフィエントクシスカ通りにぶつかる<sup>1</sup>。その十字路の角、「新世界」の先端に位置したのが、「素晴らしき新世界」Nowy Wspaniały Świat (以下NWSと記す) という名のサロンである。

オルダス・ハクスリー (Aldous Leonard Huxley, 1894-1963) のSF小説『素晴らしい新世界』*Brave New World* (1932年)<sup>2</sup>に因み名づけられたNWSは、2009年11月に開設された。芸術・学術的な会合の場であり、批評大学Uniwersytet Krytycznyの教室であり、映画の上映場所であり、エキシビジョンの空間であり、昼は文学カフェ、夜はクラブに様変わりする。NWSを運営し活動拠点とした政治評論Krytyka Politycznaは、2012年に結成から十周年を迎えた。当初、雑誌『政治評論』*Krytyka Polityczna*編集部を中心に集まった20-30代のメンバーは、第二次世界大戦も共産主義時代もじかに「経験して」はいない。新左翼を名乗る彼らは、

1 Jarosław Zieliński, *Ulica Nowy Świat* (Warszawa, 1998), p. 63.

2 邦訳にオルダス・ハクスリー『素晴らしい新世界』松村達雄訳、講談社文庫、1974年。

旧き良き「ポーランド・インテリゲンチァの伝統の再興を意図」しており、雑誌の発行にとどまらず、政治、文学、環境問題など幅広いジャンルの作品を翻訳、復刻している<sup>3</sup>。さらに、古典を再評価するだけでなく、同時代の事件にもいち早く反応し挑発的な見解を示す存在である。彼らにとってNWSは、いわばワルシャワを舞台とする知的なゲリラ活動の発信源であった。

政治評論は政治・学術・芸術の垣根を取り払うことを目標と位置づけ、歴史学から前衛芸術にいたるまで幅広いジャンルの活動を組織している。排外主義的なナショナリズムや、ファシズムの台頭には特に敏感である<sup>4</sup>。そのため、政治評論は極右グループから格好の標的とされてきた。極右組織の一つ、国民急進陣営Obóz Narodowo-Radykalny (1993年創設、以下ONRと記す)は、近代ポーランド・ナショナリズムの父ロマン・ドモフスキ (Roman Dmowski, 1864-1939) の思想的末孫にあたるが、NWSの玄関先をあえてデモの起点に選んだり、あるいは夜間デモの通りがかりにNWSへ向かって発煙筒を投げつけたりと、さかんに敵愾心を顕示している<sup>5</sup>。対する政治評論は、反ファシスト活動と称してONRのデモを路上で妨害するなどし、引かない姿勢を見せている。毎年11月の独立記念日にONRが行う「愛国的」示威運動は、警官隊や政治評論など反極右団体の対抗デモと衝突するのが風物詩となっている<sup>6</sup>。

政治評論のスタンスが際立ったのは、「カティンの森虐殺事件」<sup>7</sup>の追

---

3 雑誌『政治評論』編集部とスタニスワフ・ブジョゾフスキ協会Stowarzyszenie im. Stanisława Brzozowskiego、NWS、批評大学の沿革について、Krytyka Polityczna [http://www.krytykapolityczna.pl/krytykapolityczna] を参照。(2013年9月28日閲覧)

4 政治評論以外に、ネバー・アゲイン協会Stowarzyszenie Nigdy Więcej (英 Never Again Association) がポーランドにおける代表的な反ファシズム活動団体に挙げられる。雑誌『ネバー・アゲイン』*Nigdy Więcej*は、人種主義、ネオ・ファシズム、排外主義を標榜する集団の監視を専門に行っている。ドモフスキが創設した大ポーランド陣営Obóz Wielkiej Polski (略称OWP、1926-1933年)の系譜に連なるONRは監視対象の一つ。ネバー・アゲイン協会の活動についてStowarzyszenie Nigdy Więcej [http://www.nigdywiecej.org/index.php?option=com\_content&task=view&id=1&Itemid=10] を参照。(2013年9月29日閲覧)

5 ONRの活動についてObóz Narodowo-Radykalny [http://www.onr.com.pl/] 参照。(2013年9月29日閲覧)

悼式典に向かう政府専用機が墜落し、大統領夫妻を始め閣僚や軍エリートら96人が死亡した事故（2010年4月8日）<sup>8</sup>への反応においてであった。悲報の第一波がもたらした静寂が過ぎると、それまでレフ・カチンスキ大統領（Lech Kaczyński, 1949-2010）に対して批判的であったメディアを始め、公に表明される個人や団体の見解は一斉に追悼ムードへ傾いた。主たる検索サイトや新聞、官公庁のホームページはモノクロに色彩が抑えられ、昨日まで揶揄と風刺の対象であったカチンスキのポートレートが一夜のうちに荘厳な政治家の肖像に差し替えられる。70年前の「カティンの森虐殺事件」と緋い交ぜに国民的悲劇の共有が演出される中、『政治評論』は自粛と哀悼の強制に抗して逸早く異論をまとめ、論説集『哀悼』*Żaloba*

- 
- 6 Marek Kozubal, “Święto w cieniu demonstracji,” *Rzeczpospolita*, 11.11.2013 [http://www.rp.pl/artykul/1063166.html]. (2013年11月15日閲覧)
- 7 「カティンの森虐殺事件」では、第二次大戦初期にソ連軍の捕虜となったポーランド人将校約1万5000人のうち、大部分が1940年4-5月にスモレンスク近郊カティンの森林に連行され、銃殺された。ナチスは1943年早春に約4400人の犠牲者の墓を発見、反ソ連の宣伝目的で利用しようとした。これに対しソ連は、殺害したのはナチスであったとの主張を続けたが、1990年4月ゴルバチョフ大統領がNKVD（内務人民委員部）による関与を認め謝罪した。犠牲者の45%は職業軍人、その他は弁護士、医師、大学教授などのエリートであり「ポーランド民族の指導者達」であった。ソ連とナチスそれぞれの主張、ポーランド側の反論について、J.K.ザヴォドニー『消えた将校たち：カチンの森虐殺事件』中野五郎・朝倉和子訳、みすず書房、2012年；ヴィクトル・ザスラフスキー『カチンの森：ポーランド指導階級の抹殺』根岸隆夫訳、みすず書房、2010年；ノーマン・M・ネイマーク『スターリンのジェノサイド』根岸隆夫訳、みすず書房、2012年、97-100頁；伊東孝之「カティン事件」伊東孝之ほか編『新版 東欧を知る事典』平凡社、2001年、72頁；渡辺克義『カチンの森とワルシャワ蜂起：ポーランドの歴史の見直し』岩波ブックレット、1991年、10-22頁。殺害された将校の身元についてJanina Snitko-Rzeszut, ed., *Katyń: Księga Cmentarna Polskiego Cmentarza Wojennego* (Warszawa, 2000) のリストを参照。
- 8 2010年は「カティンの森虐殺事件」から70年目の節目に当たった。政府専用機にはポーランド空軍のパイロットら8人の乗員の他、大統領夫妻や閣僚、軍関係者、カティンで殺害された将校の遺族ら88人が搭乗していた。事故の経緯と原因の最終報告はKomisja Badania Wypadków Lotniczych Lotnictwa Państwowego, *Raport Końcowy z badania zdarzenia lotniczego nr 192/2010/11 samolotu Tu-154M nr 101 zaistniałego dnia 10 kwietnia 2010 r. w rejonie lotniska Smoleńsk Północny* (Warszawa, 2011) を参照。

を出版した（事故発生二週間後の4月22日に新刊予告、5月5日発売）<sup>9</sup>。一年後には「哀悼は終わりだ！」Koniec żałoby!と称するプロモーションを行い、NWSにおいて『哀悼』の残部を無料で配布し、長引く追悼モードと暗黙の言論規制を徹底して拒否した。

政治評論はTVPなど主要メディアの討論番組に積極的に論客を出演させるほか、ソーシャルネットワークを活用するなど、意見表明の手段は多岐に及ぶ。ズビグニェフ・ブーヤク（Zbigniew Bujak, 1954-）、アダム・ミフニク（Adam Michnik, 1946-）、ヤツェク・クーロン（Jacek Kuron, 1934-2004）ら民主化運動を指導した「連帯」知識人の遺産を引き継ぎつつ、嫌がらせのような論争喚起や意表を突く問題提起を行うのが身上である。目下クリティカルな論点としては、移民や同性愛者の権利といった共同体やメンバーシップのあり方に関する問題群が挙げられる。そして、これらの古典的形態であると同時に、最も論争的で触れ難いテーマとして影を落としているのがポーランドの反ユダヤ主義の問題である。そこで本稿では、『政治評論』の主任編集者スワヴォミル・シェラコフスキ（Sławomir Sierakowski, 1979-）<sup>10</sup>がコミットし、ワルシャワを舞台に展開された「ポーランドにおけるユダヤ再生運動」Ruch Odrodzenia Żydowskiego w Polsce（英Jewish Renaissance Movement in Poland、略称JRMiP）に着目し、その反響と意義を検討する。

## ポーランドにおけるユダヤ再生運動

「ポーランドにおけるユダヤ再生運動」は、イスラエル出身の映像作家ヤエル・バルタナ（Yael Bartana, 1970-）<sup>11</sup>監督の映画「ポーランド三部作」<sup>12</sup>において展開される政治運動である。「三部作」は『悪夢』*Mary koszmary*<sup>13</sup>（英題*Nightmares*、2007年）、『壁と櫓』*Mur i wieża*（英題*Wall and Tower*、2009年）そして『暗殺』*Zamach*（英題*Assassination*、2011年）で構成され、それぞれ15分程度のショートフィルムである<sup>14</sup>。いずれも撮影はワルシャワで行われた。バルタナの作品に特徴的なのは、撮影現場や完成した作品に展開される出来事が、現実なのかフィクションな

9 Sławomir Sierakowski et al., *Żałoba* (Warszawa, 2010).

10 シェラコフスキは2002年の創刊以来『政治評論』主筆を務める。スタニスワフ・ブジョゾフスキ協会代表。Krytyka Polityczna [http://www.krytykapolityczna.pl/history-association]. (2013年9月29日閲覧)

のか曖昧になる点である。また、もうひとつの特徴に、過剰な象徴の盛り込みがある。「三部作」の主たるテーマは、ポーランドにおけるユダヤ人住民の喪失と反ユダヤ主義の問題である。しかし、作中には一見すると直接関係はないのに人目を引く現代政治のモチーフ（例えば大統領機墜落事

- 
- 11 バルタナはイスラエル出身の映像アーティスト。祖父はポーランド北東部の都市ビャーウィストク出身であり、同地で殺害されたユダヤ人の一人であった。イスラエルでは「ポスト・シオニスト」世代に位置づけられる。オランダ、米国、イスラエルに暮らす。ホームランドと人間との関係をテーマに作品を発表してきた。『砂丘の王たち』*Kings of the Hill* (2003年)では、週末のテルアヴィヴの海岸にジープやRV車で集い、急峻な砂の山を乗り下そうと幾度も試みるが成しえない男達の姿に、シオニストの帰還と開拓を重ね合わせた。Yael Bartana, Igor Stokfiszewski and Artur Żmijewski, “Nie będziemy żołnierzami,” *Krytyka Polityczna*, no. 30 (2012), p. 200; Carol Zemel, “Yael Bartana’s Mary Koszmary and Galut Melancholy,” *Association for Jewish Studies*, spring (2011), pp. 49-50.
- 12 「ポーランド三部作」は、第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2011年）において『そしてヨーロッパは目を見張るだろう』*And Europe Will Be Stunned*のタイトルで初公開された。翌2012年には第7回ベルリン・ビエンナーレのポーランド・パビリオンにおいて上映された。ベルリン・ビエンナーレのウェブサイト [<http://www.berlinbiennale.de/blog/allgemein/interviews-zum-thema-des-jewish-renaissance-movement-in-poland-29843>]に「三部作」に対する批評が掲載されている。(2012年7月23日閲覧)
- 13 Maryは多義的であり、ポーランド人カトリック信徒の名を連想させるほか、「棺台」maryつまり遺体が安置される台や、「亡霊」「幻覚」mara（複数形mary）を意味する。Koszmaryは「悪夢」を指す仏語cauchemarからの借用語であり、語尾-marは「死」（羅語morsに由来か）に通じると考えられる。Joanna Mytkowska, “The Return of the Stranger,” in Yael Bartana, *And Europe Will Be Stunned: The Polish Trilogy* (Melbourne, 2011), p. 131; Zemel, “Yael Bartana’s Mary Koszmary and Galut Melancholy,” p. 50.
- 14 「ポーランド三部作」のうち『悪夢』と『壁と櫓』の映像は次のサイトを参照。Filmoteka [<http://www.artmuseum.pl/en/filmoteka/praca/bartana-yael-mary-koszmary-2>]. (2013年9月30日閲覧) 本稿では2012年にテルアビブ・ミュージアム・オブ・アート（ヘレナ・ルービンシュタイン現代美術パビリオンHelena Rubinstein Pavilion for Contemporary Art）の特別展Yael Bartana “…And Europe Will Be Stunned” (26.05.2012-31.08.2012)において上映された「三部作」の内容を参照した。Tel Aviv Museum of Art [<http://www.tamuseum.org.il/about-the-exhibition/yael-bartana>]. (2013年9月30日閲覧)

故は暗殺であったとする流言など）がふんだんに投入されており、バルタナと政治評論が目論む「化学反応」<sup>15</sup>の誘発剤となっている。

以下では、『悪夢』から『暗殺』にいたるバルタナ作品の内容と背景を概観する。「三部作」においては撮影場所が重要な役割を果たすため、まず『悪夢』が撮影されたスタジアムという場所がもつ含意を明らかにする。次に『壁と櫓』とムラヌフ地区、最後に『暗殺』と文化科学宮殿およびピウスツキ広場の順に、ストーリーと撮影地が負う歴史的背景とを見ていく。

### 1-1. スタジアム

2012年7月1日、四年に一度の欧州サッカー最大イベントUEFA EURO 2012（ポーランド＝ウクライナ共催大会）が幕を下ろした。後には総工費458億円余りを投じて建設された「ワルシャワ国立競技場」Stadion Narodowy w Warszawieが残る。夜には白と赤の光を放つ、二色の長方形が積み重なった巨大なカゴ型。旧市街からプラガ地区を見下ろすランドスケープに加わった構築物は、映画『第9地区』<sup>16</sup>のケーブタウン上空低くに滞留する宇宙船を連想させ、それがなかった頃の風景に慣れ親しんだ者の縮尺感覚を一瞬揺るがせる。

新「国立競技場」の建設が2008年に始まるまで、この場所には「十周年記念スタジアム」Stadion Dziesięcioleciaがあった。放置されていたという方が適切だろうか。1955年に創設された旧スタジアムは、第二次大戦終結と共産主義体制の十周年を記念する建造物であった。今となっては「アンシャン・レジーム」の象徴とも言われる。しかし、「十周年記念スタジアム」をたんに共産主義体制の遺物として片づけることもできないのは、かつて自由を求める抵抗の場ともなったためである。それを示唆するのが、新しい国立競技場の脇に据えられたリシャルト・シヴィエツ（Ryszard Siwiec, 1909-1968）の碑である。シヴィエツは、1968年9月8日、十周年記念スタジアムにおいて、統一労働者党第一書記ワウディスワフ・ゴムウカ（Władysław Gomułka, 1905-1982）ら党幹部および十万人の市民の臨

---

15 Agnieszka Kowalska, “Co robi Ruch Odrodzenia Żydowskiego na ulicach stolicy?” *Gazeta.pl*, 08.04.2011 [http://warszawa.gazeta.pl/warszawa/1,34889,9396720,Co\_robi\_Ruch\_Odrodzenia\_Zydowskiego\_na\_ulicach\_stolicy,.html]. (2013年9月28日閲覧)

16 ニール・ブロムキャンプ監督『第9地区』*District 9* (2009年)。

席する収穫祭式典の只中で自らに火を放った。ワルシャワ条約機構軍が「プラハの春」に介入したことへの抗議であったとされる。

人民よ、あなたたちの中にはまだ人間性の火花が残っているかもしれない、人間らしい感情が。目を覚ませ！ 聞け、私の叫びを！ 平凡な、普通の人間の、自分と他者の自由を何よりも愛した、自分の命よりも愛した、民族の息子の叫びを。正気を取り戻せ！ まだ遅すぎはしない。

事前に録音していた声明は公にされず、彼の呼びかけを契機とする暴動やデモなどは起きなかった。シヴィエツは4日後に亡くなり、自由と人間性の回復を訴える一市民のメッセージは黙殺された。<sup>17</sup>

同時代に民主化運動を刺激することはなかったものの、2000年代に入ってから自由なヨーロッパと人間性に殉じた「3国民の英雄」として、ポーランド、チェコ、スロヴァキアにおいて急速に評価が高まっている<sup>18</sup>。にわかな注目の高まりは、EU東方拡大のもと、一国民・一族のための「愛国者」ではなく、「ヨーロッパ」や「ヨーロッパ人」という新たな価値

17 家族や目撃者の証言を集めたマチェイ・ドリガス (Maciej Drygas, 1956-) のドキュメンタリー映画『聞け、私の叫びを』 *Usłyszcie mój krzyk* (1991年) がシヴィエツの行為と動機を明らかにするまで、彼の名が広く知られることはなかった。『聞け、私の叫びを』は式典のために全国から集まった若者たちが華やかな衣装でポロネーズなどの舞踏を披露する様子を伝えており、後述のバルタナ『悪夢』が映し出すスタジアムの姿と対照をなしている。

18 シヴィエツはルヴフ大学で哲学を修め、戦時中は国内軍AKの兵士であった。戦後は地方都市プシェミスウで平穏に暮らしていたが、ワルシャワ条約機構軍がチェコスロヴァキアへ侵攻(1968年8月)したことに憤り、式典での行動に至る。ソ連を批判するピラを撒いたともされるが、何が起きているのかその場で正確に把握してきた人は殆どいなかった。報道管制が敷かれたためメッセージが公になることはなく、当局は精神に異常をきたしたの行為と説明した。「ラジオ自由ヨーロッパ」が事件について伝えたのは翌年4月になってからであった。シヴィエツに対し、2003年9月にポーランド復興勲章が与えられたほか、チェコ政府やスロヴァキア政府からの叙勲が相次いでいる。Tomasz Urzykowski, “Pomnik bohatera stanął przy Stadionie Narodowym,” *Gazeta.pl*, 05.05.2012 [http://wyborcza.pl/1,75248,11665342,Pomnik\_bohatera\_stanal\_przy\_Stadionie\_Narodowym.html]. (2013年9月29日閲覧)

の構築が必要とされたのと平行になっている。

1980年代に老朽化が進んだ「十周年記念スタジアム」は、修繕費用の担い手もなく荒れるにまかされ、共産主義時代の栄光も影も色褪せた。89年以降は、正規の流通ルートに乗らない物品を扱うバザール、通称ロシアン・マーケットが開かれるようになる。初期にはベラルーシなどCIS諸国やベトナムから、EU加盟後は北アフリカからも売り手が加わって仮設の小店舗を連ね、賑わいを見せた。海賊版のCDやサッカーのユニフォーム、非正規品の外国タバコやスニーカー、小型家電、手編みのショール、束になった靴紐、ジーンズ。時に露天がひしめくスタンドの一点から、瞬く間に陳列台を裏返し商品を覆い隠す動きがウェブのように広がり、警察の取り締まりが来たことを知らせた。

旧スタジアムの取り壊しに先立ち、トタン張りのマーケットは一扫された。新スタジアムは、UEFA EURO 2012という全ヨーロッパ的イベントの場である。また同時に、ナショナル・カラーで首都を照らす「単一民族スタジアム」でもあり、「ポーランドが間違いなく国民国家であることを演出」する。LEDの明るさと引き換えに「ヨーロッパ的文化」を担わない売り手の集うバザールは消え、ローカルな空間におけるマイノリティの可視性が失われたのだと社会学者ヨアンナ・エルベル (Joanna Erbel) は指摘する<sup>19</sup>。バルタナが映画『悪夢』の舞台に選んだのは、客席に草が生え無人となった、取り壊し直前の旧スタジアムである。最近までワルシャワ市民の生活の一部を支えていながら、EUROを迎えるための都市計画には「そぐわない」他者として排除されることになった売り手達。彼らの不可視化が行われたばかりの殺風景なスタジアムから、バルタナとシェラコフスキが呼び起こそうとするのは、第二次大戦期および1968年に姿を消した「内なる他者」——ユダヤ人たち、そして「ポーランドの反ユダヤ主義」をめぐる論争である<sup>20</sup>。

## 1-2. 『悪夢』

「ポーランド三部作」の第一部『悪夢』は、ある「指導者」の演説の一

---

19 UEFA EURO 2012開催期間に合わせ、新スタジアムだけでなくワルシャワ市内の主要な橋や大統領宮殿などが国旗を模した紅白の光でライトアップされた。Joanna Erbel, “Stadion Jednonarodowy: Warszawa biało-czerwona,” *Krytyka Polityczna*, no. 30 (2012), p. 10.

部始終を収めた作品である<sup>21</sup>。映像は、仄暗い通路を歩く一人の「指導者」が荒涼としたスタジアムへ入場するシーンから始まる。廊下からスタジアム入口へのカメラワークは、ドリガス監督『聞け、私の叫びを』へのオマージュである。バックにはポーランド国歌「ポーランドいまだ死せず」*Jeszcze Polska nie zginęła*の荘重な演奏が流れ、眼前に灰色のフィールドが開ける。1950年代の政治家を髣髴とさせる「指導者」を演じるのは、スワヴォミル・シェラコフスキ。先述のように、シェラコフスキは『政治評論』の主筆であり、現実世界においてもポーランド・ニュー・レフトの運動を牽引する活動家である。彼を迎えるのは、ボーイスカウト風の——レニ・リーフェンタール (Leni Riefenstahl, 1902-2003) 監督『意志の勝利』*Triumph des Willens* (1935年) のヒトラー・ユーゲントを連想させなくもない——制服を着た十数人の子供達。少年少女は石灰<sup>22</sup>を使って「330万人のユダヤ人は、4000万人のポーランド人の人生を変えることが出来る」というスローガンを地面に描き、やがて「指導者」が口を開く。

- 
- 20 歴史研究の対象として「ポーランドにおける反ユダヤ主義」が正面から取り上げられるようになったのは1990年代以降である。ナチスによる占領が行われていた時期に、ポーランド人住民が自らユダヤ人迫害に加担した事例については、Jan Tomasz Gross, *Neighbors: The Destruction of the Jewish Community in Jedwabne, Poland* (Princeton, 2001) が発端となって論争が続いている。グロスにはポーランド人の加害者の側面を取り上げて注目を集めたが、それに対してバランスを取ろうとするものにRobert Blobaum, ed., *Antisemitism and its Opponents in Modern Poland* (Ithaca, 2005)。また、ナチス占領期に集中せず、より長期的な歴史的な文脈から反ユダヤ主義の生成過程を明らかにしたものにTheodore Weeks, *From Assimilation to Antisemitism: The Jewish Question in Poland, 1850-1914* (DeKalb, 2006) が挙げられる。ポーランド国内で出版されている関連文献はグロスに対する批判・擁護の双方から出されており、回想録やエッセイなども含むと枚挙にいとまがない。特に重要なものとしてAdam Michnik, ed., *Przeciw antysemityzmowi 1936-2009* (Kraków, 2010), 3 vols.
- 21 Kinga Dunin and Sławomir Sierakowski, “Mary Koszmary (Nightmares): Speech by Sławomir Sierakowski” in Bartana, *And Europe Will Be Stunned*, pp. 120-121.
- 22 生石灰はベウジェッツ収容所においてユダヤ人殺害の手段として用いられた。ヤン・カルスキ『私はホロコーストを見た：黙殺された世紀の証言1939-43』吉田恒雄訳、白水社、2012年、下巻、242-244頁。

ユダヤ人よ！

同郷の仲間達よ！

人民よ！

**人民よ！**

リフケのベッド掛の下に今なお眠る老女が、

君達に会いたがっていないと思うか？

君達を忘れてしまったと？ それは間違いだ。

老女は毎晩君達の夢を見る。恐れと震えに満ちた夢を。

君達が去り、彼女の母親がキルトのベッド掛に手を出した夜以来  
悪夢にうなされている。悪い夢に。それを祓えるのは君達だけだ。

ポーランドが失った300万人のユダヤ人を彼女の枕元に立たせ、  
悪霊を完全に狩り出さしめよ。

ポーランドへかえれ、君らの、我らの国へ！

空漠とした観客席に向かって、「指導者」は、ポーランドへ戻ってくるよう呼びかける。呼びかける視線の先にあるのは、かつてポーランドの地に暮らし、去っていった、あるいは殺されたユダヤの民である。うなされる老女はポーランドをあらわす。彼女に掛けられたキルト・カバーは、かつて親達が、ユダヤ人を象徴するリフケ（Rifke）という女性から奪ったもの。それが不治のしこりとなってポーランドを苦しめているのだという。

彼女〔老女、ポーランド〕の寝台の脇に立ち、

あの古いキルトの上に君達の手を置け。

…そう、彼女の上に手を置くのだ、そして告げてくれ、

「私たちはこのキルトをあなたにあげよう」と。

「なぜこんなものが必要だろう？ もはや綿羽は中になく、  
残っているのはただ痛みだけだ。

私達〔ユダヤ人〕の傷を癒してくれ、

それであなた方も自分の傷を癒すだろう」と。

破れた羽根枕から空中に舞い散る羽毛のイメージは、ユダヤ人に対する迫害や強制移送、ポグロムを暗示する表現として用いられる<sup>23</sup>。しかし、いま老女（ポーランド）が掛けている薄いキルトに羽根綿はない。既にユ

ダヤ人は追われてしまった後である。そして、かつての迫害者（の子）たる老女は痛みを抱えている。その痛みは、良心の呵責、戦争への参加、暴力を行使した経験、そしてそれら全てを否定する感情から生じた。「指導者」は、追放された人々を連れ戻すことによって、また、彼らが「奪われた」ものを「贈与物」と言い換えさせることによって、この痛みを解消しようとする。

しかし実のところ、想定されている「ユダヤ人」とは、誰なのだろうか？戦争や迫害で殺された人々に呼びかけているのだろうか。「指導者」は続ける。

これは、死者ではなく、生きる者に向けた呼びかけである。  
我々は、300万のユダヤ人がポーランドへ帰還するよう望み、  
君達が再び我々と暮らすことを望む。  
我々は君達を必要とする！ 我々は君達が戻るよう求めている！

「指導者」が呼びかける相手は、ここで、過去にポーランドを去ったユダヤ人の「亡霊」であるリフケと、現在を「生きる者」つまりポーランドを去り別の場所で暮らすユダヤ人との二重になる。「指導者」が求めるのは、過去の傷の癒しだけではない。戦中、戦後にユダヤ人が去ってから現在にいたるまで、ポーランド社会が排除してきた「内なる他者」を取り戻すことまで求めている。

君達〔ユダヤ人〕が去ったとき、我々は密かに喜んだ。  
そして繰り返し唱えた、  
「とうとう我々だけの、自分自身の家にいるのだ」と。  
ポーランドにいるポーランドのポーランド人、  
誰もその邪魔をする者はない。  
けれど我々は引き続き幸せではなかったから  
時折ユダヤ人を見つけ出しては、  
我々の国から出て行ってくれるよう嘆願した。

---

23 Joanna Mytkowska, "The Return of the Stranger," in Bartana, *And Europe Will Be Stunned*, p. 131.

もはや君達が誰一人残っていないことが明らかであったときにさえ、君達に出て行けと言う者は絶えなかった。

第二次世界大戦期に行われた強制収容所その他の場所での殺戮の結果、ポーランドの人口の十人に一人を占めたとされるユダヤ人コミュニティは崩壊したが、それでも数万人が国内に残っていた。終戦直後には、強制収容所を生き延びた元住民が自宅に戻ってきたところ、同宅を占拠するポーランド人住民（彼らも戦災で家を失っていた）に殺害されるといった事件が頻発した。ユダヤ人殺害の多くは金銭がらみの理由であったとされるが、身体もまた標的にされた<sup>24</sup>。ナチスが退却した後も、ポーランドはユダヤ人にとって安全な場所ではなかった。最終的にユダヤ人住民がポーランド社会から姿を消したのは、1968年の反ユダヤ・キャンペーンの際であった。現在では、人口の97%近くが「西スラブ系のポーランド人でカトリックを信仰」<sup>25</sup>する、「単一民族的」な「国民国家ポーランド」が標榜されるにいたった<sup>26</sup>。しかし、実際にはもうユダヤ人は残っていないにもかかわらず、反ユダヤ主義が絶えることはなかった。

そしてどうなったか？

今では我々は同じ顔を見あわすのに飽きあきしている。

大都市の街路の外国人を眼にし、外国語を耳にする。

そう、今はもう分かっているのだ、自分達だけでは生活できないと。

我々は他者を必要としている、

そして我々にとって親しい他者は君達を措いて外にない！

来たれ！ 同じでありながら、しかし変化をとげた人々よ。

---

24 ポール・ザヴァツキ「ポーランド」レオン・ポリヤコフ『反ユダヤ主義の歴史V：現代の反ユダヤ主義』菅野賢治・合田正人監訳、筑摩書房、2007年、287-288頁。

25 外務省「ポーランドという国」『わかる！国際情勢』vol. 22、2009年1月7日 [http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol22/index.html]。(2012年7月23日閲覧)

26 「カトリック国ポーランド」というフィクションや、その確立のために前ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が演じた役割に対して、プロテスタント・マイノリティの立場から辛辣な批判を行ったTomasz Piatek, *Antypapież* (Warszawa, 2011) が政治評論から出版されている。

共に住まおう。  
そして互いに異なる存在でいよう、  
ただし一方が他方を傷つけることなしに。

かつて排除した人々に向かって、「指導者」は「ポーランド人」を代表し、ポーランドへ戻るよう訴えかける。「我々ポーランド人」が傷つけた人々を説得し、異なる者同士の共生と協力を訴える根拠はどこにあるのか。

私たちは共に、  
世界がまだ見たこともない仕事を成し遂げることが出来る。  
ヨーロッパは目を見張るだろう。  
…我々に足りないのは君だ！  
…戻ってきてくれ！  
そうすれば、我々も君たちも両方が、  
選ばれた民であるのをついに止めるだろう。  
苦しむために、傷を負わされるために、  
傷を負わずために選ばれた民であることを。  
戻ってきてくれ、そうすれば私たちは、  
ようやくヨーロッパ人になれるのだからから。

「指導者」は「ヨーロッパ・ニュースピーク」<sup>27</sup>を用い、ポーランド人もユダヤ人も「共にヨーロッパ人になる」という共通目標を説得の根拠とする。演説は、「指導者」がこれから開始しようとする「ポーランドにおけるユダヤ再生運動」のマニフェスト<sup>28</sup>の文言をもって頂点に達する。

私たちは、  
一つの言語で、話すことは出来ない。  
一つの信仰に、従うことは出来ない。

---

27 Mytkowska, “The Return of the Stranger,” p. 131. ニュースピークについてジョージ・オーウェル「附録」『一九八四年』（新訳版）高橋和久訳、2009年、ハヤカワepi文庫、464-481 [1-18] 頁。

28 Yael Bartana, “The Jewish Renaissance Movement In Poland: A Manifesto,” in Bartana, *And Europe Will Be Stunned*, p. 126.

一つの色で、見ることは出来ない。

一つの文化で、感じることは出来ない。

君達なしには、記憶することすら出来ない。

君達がいなければ、我々は過去に閉じ込められたままだ、  
しかし君達と共になら、未来が私たちの前に開けるだろう。

選ばれた民に未来はない。

ユダヤ人よ！

同胞達よ！

人民よ！

今でないなら、いつだというのか？

私たちでないなら、誰がいるというのか？

誰がポーランドを泥濘の淵から引き上げてくれるというのか？

グローバルな市場が全てを似たものにしてしまうまで、

あるいは新たなナショナリズムの突発まで、…待てというのか？

一卵性になるのではなく、ひとつになろう。

私たちは二度と、互いを搾取したり、屈辱を与えたり、  
仕事の果実を盗んだりしない。

この次は、墓地の隣に、私たちが学校や病院を建設しよう。

木を植え、道を作ろう。

もし君達が望むなら、共に月まで旅しよう。

いま帰還せよ、そうすればポーランドは変わり、ヨーロッパは変わり、  
世界は変わる。

そして君達はこれまでと違った存在になる。

帰還せよ、過去の影としてではなく、未来の希望として。

歓迎する！

## 2-1. 不可視化の要因

『悪夢』において、「指導者」は、ポーランドにおける反ユダヤ主義の存在と、ポーランド人による積極的なユダヤ人迫害があったことを前提に、しかし決然とユダヤ人住民に帰還を呼び掛けた<sup>29</sup>。スタジアムの観客席が無人であるのは、ポーランド社会における反ユダヤ主義の問題がいかにも不

可視化されてきたかを暗示する。その反面、この問題は一旦指摘されると過剰な反発を引き起こしもするのだが、多くの場合は「防御的」反応であるという<sup>30</sup>。最近の例として、バラク・オバマ大統領（Barack Obama, 1961-）の「ポーランドの死のキャンプ」発言をめぐる騒動が挙げられる<sup>31</sup>。

米国のメディアではあまり取り上げられなかった「オバマの失言」は、なぜポーランド・メディアの神経質な反応を引き起こしたのであろう。一つには、UEFA EURO2012の開幕を一週間後に控えたタイミングで、外から見たホスト国のイメージが人種主義を許さないヨーロッパ標準に適合するか、過敏になっていたことが理由であった。全ヨーロッパの眼がポーランドに注がれるであろうイベントにおいて、サッカースタジアムの客席に一枚たりとも反ユダヤ主義や人種差別の旗が持ち込まれてはならない、との声が聞かれた。また、遑れば「ポーランドの収容所」という表現は、「アウシュヴィッツ強制収容所」が「負の遺産」としてユネスコ世界遺産に登録された際にも問題とされている（1979年）。以来政府は、ポーラン

29 ポーランドへのユダヤ人の帰還という発案は、フィリップ・ロス（Philip Roth, 1933-）の『シャイロック作戦』（1993年）を下敷きにしている。Carol Zemel, “The End (s) of Irony,” Forward.com [http://forward.com/articles/139457/the-ends-of-irony/]. (2013年9月30日閲覧) なお、「ポーランドにおけるユダヤ再生運動」とロス作品との関係について赤尾光春先生よりご教示いただいた。

30 ザヴァツキ「ポーランド」274頁。

31 2012年5月29日、ホワイトハウスにおいて、文民を対象とする勲章としては米国最高位の大統領自由勲章の授与式が行われた。受勲者の列に名を連ねたヤン・カルスキ（Jan Karski, 1914-2000）は、第二次大戦中バリ（後にロンドン）に拠点を置いたポーランド亡命政府と、国内の地下活動とを結ぶ伝書使として占領下の実情を伝えた。カルスキはユダヤ人活動家の協力を得てワルシャワ・ゲットーに潜入したほか、ベウジェッツ強制収容所とおぼしき施設を調査、英米の政治家や教会関係者に対しユダヤ人根絶が遂行されていると警鐘を鳴らした。今回の大統領自由勲章の叙勲は、カルスキの生誕100年に先立って企画された。本来であればポーランドにおいても好意的に報じられるはずの出来事であったが、叙勲式においてオバマ大統領が、カルスキは第二次大戦中「ポーランドの死のキャンプPolish death camp」に潜入した、と発言したために激しい反発を招いた。地理的な意味合いで「現在のポーランド領内に位置する、かつてナチスが建設した、死のキャンプ」を短縮した表現であったところが、“polski obóz śmierci”と訳され、あたかもポーランド人が収容所を建設・運営したかのような印象を与える、と解されたのである。

ド人ではなくナチスによって収容所が建設されたことを明示するため「アウシュビッツ・ビルケナウ：ナチス・ドイツの強制・絶滅収容所（1940-1945年）」への変更を要請してきた（2007年に改称）<sup>32</sup>。

在仏の歴史家ポール・ザヴァツキ（Paul Zawadzki）は、ポーランドにおいては「反ユダヤ主義を問題として取り上げること自体が不当」であり、「ポーランドに対する激しい敵意の表れ」として認識されてきたと指摘する<sup>33</sup>。その要因として、以下3つの要因を挙げている。第一に、シンメトリー説。つまり反ユダヤ主義のカウンターパートとして、反ポーランド主義（ユダヤ人の側からの）が存在するという主張である。第二に「犠牲者のナショナリズム」たるポーランド・ナショナリズムにとって、ユダヤ人を迫害する加害者の役割はふさわしくないという意識。そして第三に、「ポーランドの永遠なる反ユダヤ主義」に対抗して掲げられる「ポーランドに内在する寛容精神」の歴史的な証拠の数々、を指摘している<sup>34</sup>。これらの要因は、同時代的にも後世からの歴史解釈を行う際にも、反ユダヤ主義を不可視化する方向へと常に作用してきた。

バルタナ「三部作」の第二部『壁と櫓』は、ポーランド社会において透明な存在として触れられずにいたユダヤ人問題を、文字通り実体を伴った形で現前させる。第二次大戦末期に移送の中継地となり、大量に詰め込まれた人々が、飢餓の中で絶望的なゲッター蜂起に追いやられたムラヌフ地区。ワルシャワ都心のこの場所に、「過去の影ではない」生身のユダヤ人達が、ステレオタイプ的にイスラエルの力強い「入植者」として「帰還して」来るのである。

## 2-2. ワルシャワ都心に明滅するキブツ

ユダヤ人にポーランドへ帰還するよう訴える内容であった第一部『暗殺』に対し、第二部『壁と櫓』では、「指導者」の呼びかけに応じて戻ったユダヤ人の入植活動が描かれる。入植地に選定されたのはムラヌフ地区、第二次大戦期のワルシャワ・ゲッター跡地である。詩人の細見和之（1962-）は、ワルシャワを「二十世紀の首都」と呼ぶ。ポーランドという場所では

---

32 “World Heritage Committee approves Auschwitz name change,” 28.06.2007 [http://whc.unesco.org/en/news/363]. (2012年6月19日閲覧)

33 ザヴァツキ「ポーランド」274頁。

34 ザヴァツキ「ポーランド」275-278、281頁。

なく、時代の首都である。社会主義の実験の舞台であったモスクワでも、西・中央ヨーロッパのユダヤ人が集められ殺害されていったアウシュヴィッツという多言語空間でもなく、1940年11月に封鎖されたワルシャワ・ゲッソーの状況が、二十世紀という時代を象徴的に示しているのだという<sup>35</sup>。ワルシャワ・ゲッソーの境界線は1940年10月に漸次的に確定され、11月15-16日に封鎖された。この間の様子をハイム・A・カプラン（Chaim A. Kaplan, 1880-1942）の日記は次のように述べている。

ゲッソー令が施行される日、いたるところ、大混乱に陥った。ポーランド人は押し問答を始めた。この近郊には自分たちの教会がある、あの郊外の地区に住んでいるのはほとんどがポーランド人だ、ここは自分たちの美しい学校がある、…等々。これらの正当な所有者が、どうして追い出されなければならないのか。こうして、彼らはユダヤ人地区の領域から、この地区あの地区、この通りあの通りと少しずつ削除していき、ゲッソーの領域はますます狭められていった。<sup>36</sup>

ムラヌフ地区に建設されたゲッソーの壁の内側、僅か3.3平方キロメートルの敷地には、40万人以上のユダヤ人らが押し込められた。1942年7月の「大量輸送deportacja」により、ここから27万人が絶滅収容所へ送られ、殺害された。追い詰められたユダヤ人が武器を取ったゲッソー蜂起はドイツ軍の火器に圧倒され、翌43年4月までに地区は壊滅。さらにその翌年、1944年8月1日に、今度はポーランド人市民が主体となりワルシャワ蜂起が起こる。しかし、ソ連軍はヴィスワ川対岸まで到達していながら蜂起の反ソ的性格をかんがみ、援護に動かなかった。ワルシャワは二ヶ月の間破壊しつくされた。

ポーランドにおける反ユダヤ主義の問題を考えると、ワルシャワの廃墟は二つの相貌を呈している。一方ではユダヤ人を強制収容所へ移送する

35 細見和之「訳者解説：カツェネルソン、あるいは「ワルシャワ——二十世紀の首都」」イツハク・カツェネルソン『ワルシャワ・ゲッソー詩集』細見訳、未知谷、2012年、169-189頁。

36 1940年10月22日の日記。ハイム・A・カプラン著、アブラハム・I・キャッチ編『ワルシャワ・ゲッソー日記：ユダヤ人教師の記録（縮訳版）』松田直成訳、風行社、2007年、120頁。

基点となった分岐の場所であり、他方において、ゲッター蜂起とワルシャワ蜂起という共通の辛酸の経験が、ポーランド人とユダヤ人を「犠牲者」、「殉教者」として結び付けてもいる。この二面性は、ポーランドにおける反ユダヤ主義が議論されるたびに示される、二種類の相反する「証拠」と一致している。ポーランド人はユダヤ人迫害を積極的に行ったのか、あるいは命を賭してユダヤ人を庇い救ったのか。こうしたポーランドの「被害者」性と「加害者」性は、重ね合わされる白鷺とダビデの星が示唆するように、ユダヤ人にも付与されることになる。

『壁と櫓』は冒頭から「ポーランドいまだ滅びず」の力強い演奏と歌声に合わせ展開する。1930年代のキブツ（イスラエルの農業共同体）の若者に典型的な、白シャツにチノパンツ姿の数十人が、VOLVOの大型トラックで雨あがりの芝地に木材を運び込む。「ワルシャワにユダヤ人共同体を再建するための…我々の持ち時間は24時間だ」という指揮官の激励を受け、快活な若者たちは穴を掘り、柱を立て、石を運び、「キブツ・ムラヌフ」の防壁と見張り櫓を手早く建設する。

作業がひと段落したところで、一人の青年がハーモニカで奏でる牧歌的な「ポーランドいまだ死せず」の調べに、若者たちは満ち足りた表情で憩う。「指導者」は完成間近のキブツを訪ね、赤い布を手渡す。ダビデの星と白鷺を重ね合わせた「ポーランドにおけるユダヤ再生運動」のロゴマークが白抜きにされた旗。若者たちはげに誇らしげな表情を浮かべ、見張り櫓の上から旗を掲げる<sup>37</sup>。

キブツの若者たちはダビデの星と白鷺の重なるロゴが赤く染め抜かれた腕章を身につけており、かつてゲッターの住民が強制された差別的な「恥辱のバッジ」は、形を変えて肯定的なアイデンティティの表出に用いられている。壁の中の一画は青空教室になり、ウルパン（移民向けのヘブライ語クラス）さながらにポーランド語の授業が行われる。「土地はziemia、

---

37 『壁と櫓』の撮影は、ルドヴィク・ザメンホフ通りとユゼフ・レバトフスキ通り、カルメリツカ通り、モルデハイ・アニェレヴィチ通りに囲まれた一画で行われた。ここから300メートルほど離れたムラヌフ広場Plac Muranowski（現存しない）には、ゲッター蜂起の際、ユダヤ人戦闘員らによって、ポーランドの旗とシオニストの旗の二種の旗が掲げられていた。Mosze Arens, *Flagi nad Gettem: Rzecz o powstaniu w getcie warszawskim* (Kraków, 2011), p. 10.

自由はwolność、平和はpokój」と黒板に記す女性教師の発音を追い、生徒らは耳新しい音を真似、口ずさむ。そして「ポーランド語ってきれいな言葉ね」と呟く。

夕闇が迫ると、見張り櫓のサーチライトがゲッター蜂起記念碑Pomnik Bohaterów Gettaを照らす。サーチライトに背景の不協和音加わることにより、鉄条網の壁はゲッターの壁ばかりか強制収容所のそれをも連想させる。ユダヤの民のモニュメントを高みから照らし出す入植者たちの姿には、「帰ってきたユダヤ人」が遺産として引き継いだ「被害者」の優位性だけでなく、「加害者」に通じる要素が浮かび上がる<sup>38</sup>。バルタナは、過去にポーランドにおいてユダヤ人が蒙った仕打ちと、現在イスラエルが「アラブ人」に対して行っている「二級市民」扱いとを、同質の問題として結びつける<sup>39</sup>。重武装した「ユダヤ人国家」イスラエルの出現による、パレスチナ人という新しい「ユダヤ人」の迫害<sup>40</sup>。ユダヤ人をポーランドに帰還させるというアイディアは、転じてイスラエルへのパレスチナ難民の帰還という解を派生させ、現実世界に跳ね返ってくる。これは、必ずしもイスラエルの観客だけに向けられたアナロジーではない。イスラエルは「ポーランド・ユダヤ人」の手によって建設された「パレスチナのポーランド国家polskie państwo w Palestynie」でもであるとバルタナは指摘する<sup>41</sup>。「ユダヤ人」を被害者から加害者へと反転させるパレスチナ問題は、「歴史の被害者」としてのアイデンティティに立てこもるポーランドの責任の在り方を、幾重にも揺るがせることになる。

翌朝、集合住宅に囲まれた芝地に突然壁が建設されてしまったのを、近所の老人達がいぶかしげに眺めている。向かい側の団地に続く小道がふさ

38 「イスラエルの人間」Homo Israelicusの「被害者」性と、「自分たちが行う犯罪の正当化」について、エイアル・シヴァン「抑圧の記録」菊池恵介訳、『前夜 別冊ルート181：パレスチナ～イスラエル旅の断章』2005年、12頁。

39 Bartana, Stokfiszewski and Żmijewski, “Nie będziemy żołnierzami,” p. 202.

40 板垣雄三「バーチャル・ルートに立ってたたかう」『前夜 別冊ルート181』15頁。

41 Bartana, Stokfiszewski and Żmijewski, “Nie będziemy żołnierzami,” p. 201. さらに、ホロコーストの生存者たちがイスラエルに持ち込んだのは「またここがアウシュヴィッツになってしまうのではないかという恐怖心」であったと指摘するものにアロハン・アッペルフエルド「ホロコーストと私」『ナマール』第二号、1997年、17頁。

がれたため、壁に沿って回り道する人もいる。キブツの門は開かれているが、なぜか壁の上には鉄条網が幾重にもめぐらされ「侵入者」を拒む。入り口にヘブライ語で書かれた“Welcome”のメッセージを、通りかかるポーランド人が理解することはない。

第三部『暗殺』において、現実とフィクションの混在は一層際立つ。文化科学宮殿Pałac Kultury i Nauki（略称PKiN）とピウスツキ広場Plac Marszałka Józefa Piłsudskiegoにおいて行われた撮影は、通行人を目撃者に変え、「ユダヤ再生運動」に抱く感情が興味であれ嫌悪であれ、ポーランドの人々もまた問題の当事者であることを意識させようとする。

### 3-1. 『暗殺』

『暗殺』は、何者かに殺害された「指導者」の棺が文化科学宮殿に運び込まれるシーンから始まる。1950年代に「スターリンからの贈り物」として建設された文化科学宮殿は、大き過ぎる存在感ゆえに消すことのできない共産主義時代の遺産である。宮殿のホールに眠る「指導者」のもとへ、キブツ・ムラスフの住民らが別れを告げに訪れる。彼らはワルシャワの街へ出てゆき、「ポーランドにおけるユダヤ再生運動」の旗やポーランド国旗、EUの青旗を手に集い、「ナショナリズム＝テロリズム」というプラカード掲げる。デモの目的地であるピウスツキ広場には「指導者」の巨大な胸像が設置され、追悼式典が開かれる。2011年4月の第一週、つまり「カティンの森」大統領機墜落事故（2010年4月10日）の一周忌を目前に、ピウスツキ広場で行われたこの場面の撮影の様子を『ガゼタ・ヴィボルチャ』の記者は次のように描いている。

ピウスツキ広場では、十字架の擁護者達が「お前達はキリストを殺した！」と叫び、撮影班を攻撃した。また、スキンヘッド達は、ポーランド国旗が冒瀆されていると警察に通報した上、シェラコフスキの巨大な半身像を夜間に広場から撤去しようと試みた。<sup>42</sup>

ピウスツキ広場にはワルシャワ蜂起の無名戦士の墓が置かれており、国民的な式典が行われるのはこの場所であることが多い。ローマ教皇ヨハネ・

---

42 Kowalska, “Co robi Ruch Odrodzenia Żydowskiego na ulicach stolicy?”

パウロ二世（John Paul II, 1920-2005）が選出後初めて帰国した際に凱旋演説を行った場所であり<sup>43</sup>、また彼の訃報を受け無数の若者がろうそくを手に集ったのもこの広場であった。大統領機事故の犠牲者96名を悼む集会が行われたのはちょうど一年前であり、彼らのための十字架モニュメントが設置されている。人々が二つのカティン事件への思いを新たにする時期・場所に、大がかりな張りぼての像を運び込み、「暗殺された指導者」<sup>44</sup>を追悼する式典を行うことは「国民的悲劇」を冒瀆することにもなりえた。

ただし「暗殺」というキーワードは、カティンの事故だけでなく、イツハク・ラビン（Itzhak Rabin, 1922-1995）や、「ユダヤ人の票で選ばれた」と非難され選出直後に暗殺された戦間期ポーランドの初代大統領ガブリエル・ナルトヴィチ（Gabriel Narutowicz, 1865-1922）<sup>45</sup>にも及ぶ。文脈の混線は、本筋であるユダヤ人の帰還問題においても一層高まる。シェラコフスキを悼み、式典で発言する人々の中には、実際にポーランドを追われイスラエルへ渡ったユダヤ人も含まれているからである。彼らは本人役で撮影に参加するためにポーランドへ「帰国」あるいは「渡航」してきた。

- 43 ピウスツキ広場（当時の名称は勝利広場Plac Zwycięstwa）の演説において「こんなにも素晴らしい過去を持ち、しかし、こんなにも恐ろしい困難を得た民族を、キリストなしに理解することはできない。クラクフ郊外通りの教会の前に、救世主キリストの像が、十字架を負ったまま瓦礫とともに地面に倒れていたこと、それを思い出さずして、ポーランドの首都ワルシャワ、1944年に戦うことを選び、破壊されたこの都市を理解することはできない」とヨハネ・パウロ二世は述べた。ポーランド語で語る「ポーランド人教皇」の演説に、広場一帯は聴衆で埋め尽くされた。一連の演説の中で教皇は、ポーランド国家のキリスト教受洗から千年余が経とうとしていることに触れ、千年の間にポーランドの人々が払わねばならなかった犠牲を思い起こさせ、苦難の歴史と重ね合わせて、非人間的な共産主義体制の現在の在り方を批判した。演説では幾度となく「同胞達よ！Rodacy!」という聴衆への呼びかけを繰り返し、自分自身を「ポーランドの大地の息子」と呼んで、ポーランドとのつながりを強調した。Marcin Przewszewski, “Pierwsza pielgrzymka Jana Pawła II do Polski,” *eKai.pl*, 02.06.2012 [http://ekai.pl/wydarzenia/x7323/pierwsza-pielgrzymka-jana-pawla-ii-do-polski/]. (2013年9月29日閲覧)
- 44 カチンスキ大統領機墜落事故について『ガゼタ・ポルスカ』*Gazeta Polska*など一部メディアは暗殺zamachであったと示唆し、反ロシア姿勢を強めた。
- 45 ナルトヴィチと少数民族連合の関係について安井教浩「ポーランドの政治言語における『ユダヤ人』：1922年の大統領暗殺前夜の場合」『神話・象徴・文学3』楽浪書院、2003年、283-333頁。

「ユダヤ再生運動」に対する彼らの見解は、一様ではない。

発言者の一人アローナ・フランケル (Alona Frankel, 1937-) <sup>46</sup>は、運動の主張に部分的にのみ賛同する。クラクフに生まれた彼女はポーランドを「祖国」と呼ぶが、「戦後の反ユダヤ的な迫害」によって、「両親と共に12歳でイスラエルへ渡ることを余儀なくされた」と語る。今彼女が求めるのは、ポーランド市民権の再付与である。今後もイスラエルに住み続けるつもりであり、ポーランドに戻る意思はない。それでも、かつて奪われた市民権の回復が「歴史的公正」のために必要であるという <sup>47</sup>。

これに対し、テルアヴィヴ出身のジャーナリスト、ヤロン・ロンドン (Yaron London, 1940-) は、「ユダヤ再生運動」に懐疑的な見方を述べる。イスラエルの人々は、もはや以前の様なユダヤ人ではなく、イスラエル人になっている。イディッシュ文化は死に絶え、懐かしむ人はほとんどいない。「ディアスポラはアウシュヴィッツで終わったのだ」、「血塗られた大量虐殺の…犠牲者たるユダヤ人は、もう二度と、自分を他者の慈悲に委ねはしない」。したがって、イスラエル国家と軍こそが、次なるホロコーストに抵抗する最後の保障なのだ、と <sup>48</sup>。

もはや「ユダヤ人」でないという「イスラエル人」の発言を受けながらも、ポーランドの子供たちは、「落胆が去った後には、ふたたび運動の旗を掲げ」、シェラコフスキが遺した「真のユダヤ＝ポーランド再生の計画を実行する」と誓う。共生の高い理想のもとに、ポーランド人とユダヤ人が協力し、ナショナリズムやレイシズムがヨーロッパを覆うのを防ぐのだという。

こうした発言の様子を、殺されたユダヤ人の亡霊リフケは群衆と共に見守っている。やがて日は落ち、子供たちが瓶に入ったろうそく（墓地や追悼の場でしばしば用いられる）を並べ運動のロゴマークをかたどる。黒服のリフケはその光から遠ざかり、暗闇に溶けていくのである。

---

46 フランケルは児童文学作家として知られる。自伝的作品『少女』はヤド・ヴァシムにより2005年のブックマン賞に選ばれた。邦訳された作品に、迫害による憎悪の肥大とその解消とを寓話的に描いた、アローナ・フランケル『おうじよさまとなかまたち』もたいなつう訳、鈴木出版、2008年。

47 Bartana, *And Europe Will Be Stunned*, pp.123-124.

48 Bartana, *And Europe Will Be Stunned*, p. 124.

### 3-2. 喪失の歴史は可能か？

「ポーランド三部作」に関して、『政治評論』は二度特集を組んでおり、監督バルタナによる解説のほか、イスラエルのジャーナリストらの反応を知ることができる。その中でも、「道徳を言うのは裏切り者だけだ」“Tylko zdrajcy mówią o moralności”と題したギデオン・レヴィ（Gideon Levy, 1953-）へのインタビューは、イスラエルからの「典型的な」反応と同時に、喪失と回復に伴う問題を提起している<sup>49</sup>。レヴィは「ポーランドにおけるユダヤ再生運動」について、次のような懐疑を述べる。

ユートピアというのは、全体としての公正が達成される可能性を信じていることだ。パレスチナ人たちはパレスチナへ戻り、ヨーロッパ人のユダヤ人はヨーロッパへ戻る。そして、アラブ人のユダヤ人はアラブ諸国へ戻る。それが相対的に見て争う余地のない公正といえるだろう。二千年前、イスラエル人たちが説明するように、ユダヤ人はこの地から駆り立てられ追われた。…しかし、歴史の推移を遡ることは出来ない。ポーランドから消えた330万人のユダヤ人が、もういないのと同じように。彼らの大部分は殺害され、子供や孫達、ひ孫達は、彼ら〔殺されたユダヤ人〕の祖国とのつながりをもう何も持っていない。

運動のアイディア自体は気に入っているというレヴィだが、イスラエルの新しい世代は別のアイデンティティを持っている、と指摘する。新たなイスラエル・アイデンティティは日々強化されており、彼らはますますユダヤ的でなくなり、かつポーランド的でなくなっている、という。

そして、ポーランドもまた、ユダヤ人が去った時点と同じポーランドで

---

49 以下、レヴィの発言はGideon Levy and Artur Żmijewski, “Tylko zdrajcy mówią o moralności,” *Krytyka Polityczna*, no.30 (2012), pp. 214-221. から引用。なお『政治評論』の枠外からの反応として、ヴロツワフ出身のドキュメンタリー作家カタカ・レシケ（Katka Reszke, 1978-）は、バルタナの運動を1990年代以降のポーランドにおけるユダヤ文化ブームと関連付け、好意的に受け止めている。Katka Reszke, *Powrót Żyda* (Kraków, 2013), p. 52. またユダヤ人DP（Displaced Person）について、野村真理『ホロコースト後のユダヤ人：約束の土地は何処か』世界思想社、2013年、5-18頁。

はない。国境線の変更、住民交換、冷戦、そして体制転換を経たポーランドについて、レヴィは自分の父を例に述べる。

私の父など、戦前に家族で暮らしていた町を訪ねる気になれないという。イスラエルではずっとDPのように感じているというのになだ。父は、決してここ〔イスラエル〕に居場所を見つけることができなかった。それでも、ポーランドへ帰らなかった。なぜか。空虚との対峙、かつて自分が持っていたものの欠如と向き合うことを意味したからだ。

バルタナもまた、祖父が生まれ育ったビャーウィストクの町について、文化的な大都市を想像して父祖の街を誇りに感じていたのに、地方の小都市に過ぎなくなってしまった現在の様子を期待外れに感じたと言っている<sup>50</sup>。ユダヤ人が懐かしむ故郷は、もはや存在しない。「ユダヤ再生運動」が取り戻そうとする人々は、イスラエル建国を経て変化しており「ユダヤ人」ではなく「イスラエル人」になっている。存在しないユダヤの人々に対する、存在しない場所からの帰還の呼び掛けは、過ぎ去った時間がもたらす変化を無理にでも元に戻そうと試みるとき、さらなる障害に直面する。

〔ユダヤ再生運動の〕思考方法には、何かナショナリスティックなものがある。なぜなら、ユダヤ人を帰還させようと呼びかけている人々は、現在ポーランドに生きている移民達を排除する人々へと変化しうるからだ。

レヴィの考えでは、ある時点の過去を再現しようとする場合、その時点では存在しなかったが現在は存在する集団を排除する必要が出てくることになる。『悪夢』において、旧スタジアムからバザールの売り手たちを排除したのは、「ユダヤ再生運動」であったのではないか。ここに、多文化性を志向するようになって、実は排他的にもなりうる運動の本質がある、とレヴィは指摘する。それは、レヴィやバルタナが批判する、イスラエルによるアウシュヴィッツの「利用」からも明らかになる。

---

50 Bartana, Stokfiszewski and Żmijewski, “Nie będziemy żołnierzami,” p. 200.

〔バルタナの映画は〕ユダヤ人を懐かしがるポーランド人たちを見せてくれる。知っての通り、イスラエルの人々の大部分は、ポーランド人はみんな反セム主義者だと確信している。毎年、1000人のイスラエルのティーンエージャーがアウシュヴィッツを見学しに行く。そして帰り道ではこう言うのだ、ポーランド人と口を利かないようにしよう、と。彼らはみんな、ユダヤ人を憎悪しているのだから、と。だからユダヤ人を懐かしがるポーランド人の映像は、私に言わせれば、回復に役立つものだ。ユダヤ人はヨーロッパ社会にとって（発展の障害物ではなく）宝であったと聞かされるときには、私は誇りに感じる。…しかし正直に言うと、これをより一層実践的な態度へと置き換えるのは難しいだろう。時は過ぎ、歴史を変えることは出来ない。いまさらポーランドへ引越せば、イスラエル人は移民になるわけで、外国人になってしまう。…

…アウシュヴィッツ訪問のように、若者達は、洗脳に参加する。彼らはしばしばあの場所を訪れるが、ポーランドの現実を知らないし、ポーランド人と話し合いもしない。一層ナショナリスティックでミリタリーに、排外的になって家に帰ってくる。アウシュヴィッツを見た後では、彼らは、ヨーロッパとの結びつきがより一層小さいものだと感じるようになる。そして、ヨーロッパを憎悪するようになる。

現代イスラエルの若者が憎悪するヨーロッパと、ヨーロッパを新たな価値の拠り所として「帰国」を訴える「ポーランドにおけるユダヤ再生運動」。相手からの承認と、過去の瑕疵の回復とをそれぞれに求めながら、互いの視線はねじれて交わらないのである。

## おわりに

2013年4月19日、ワルシャワ・ゲッター蜂起の勃発から70年目のこの日、記念碑前の広場にポーランド・ユダヤ歴史博物館 Muzeum Historii Żydów Polskich が開館を迎えた<sup>51</sup>。そこは二年前にバルタナが『壁と櫓』を撮影し、一昼夜のうちにキブツ・ムラヌフを出現させた芝地である。キ

51 Muzeum Historii Żydów Polskich [http://jewishmuseum.org.pl/]. (2013年9月30日閲覧)

ブツのバラックとは打って変わり、圧倒的な完成度の現代建築は、ポーランドにおけるユダヤ人の確固たる存在感を印象付けるかに見える。遠からず巡礼先のリストに加えられ、キブツ・ムラヌフの入植者とは比較にならない数の人々がイスラエルから訪れるのだろう。白くゆるやかに湾曲する吹き抜けの天井、正面のガラスの壁から見通せる広場、しかし僅かに暫定的な展示が行われているのを除くと、常設展の入るべき場所はまだ空のままである。

さて、ポーランド・ユダヤ歴史博物館の建設が進み形になり始めた2012年の初夏、姿を消したものがあつた。シェラコフスキら政治評論の活動拠点NWSである<sup>52</sup>。戦前の所有権が回復されたため建物が私有化されたのに伴い、新世界通りのオフィスの明け渡しを求められた政治評論は撤退を余儀なくされた<sup>53</sup>。折から地下鉄延長工事が開始され、隣接するシフィエントクシスカ通りには大型クレーンや杭打ち機が連なる。空き家となった新世界通り63番の窓には土埃と騒音だけが残った。呼び戻すつもりがなかった「亡霊」の復活により一時は行き場を失った政治評論だが、2012年7月よりフォクサル通りのアパートメントに移転し活動を続けている<sup>54</sup>。

\*本稿はGCOE-SRC研究員セミナー（2012年7月24日、於北海道大学スラブ研究センター、法学研究科政治系院生研究会STS共催）での報告「素晴らしき新世界の遊撃：ポーランドにおける『政治評論』の動向2002-2012」の内容に加筆・修正を加えたものである。草稿にコメントをくださった赤尾光春先生、また、取材に応じたくださったミハウ・ストフスキ氏（Michał Sutowski; Krytyka Polityczna）に

---

52 “Koniec świata! Nowego Wspaniałego Świata,” *Moje Miasto Warszawa*, 16.07.2012 [http://www.mmwarszawa.pl/419872/2012/7/16/koniec-swiata-nowego-wspanialego-swiata?category=kultura]. (2013年9月30日閲覧)

53 移転先として、スタジアムのあるブラガ地区や、ユダヤ劇場Teatr Żydowskiなどユダヤ文化関連団体が拠点を置くムラヌフ地区が取りざたされたが、いずれも受け入れ先との折り合いがつかなかった。Małgorzata Zubik, “Krytyka Polityczna przeniesie się na Pragę?” *Gazeta.pl*, 11.05.2012 [http://warszawa.gazeta.pl/warszawa/1,34889,11699680,Krytyka\_Polityczna\_przeniesie\_sie\_na\_Praga\_.html]. (2013年9月30日閲覧)

54 Małgorzata Zubik, “Krytyka Polityczna ma nowy lokal: 500 mkw przy Foksal,” *Gazeta.pl*, 11.07.2012 [http://warszawa.gazeta.pl/warszawa/1,34889,12106652,Krytyka\_Polityczna\_ma\_nowy\_lokal\_500\_mkw\_przy\_Foksa1.html]. (2013年9月30日閲覧)

感謝する。